福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

臨床心理学的視点が教師の専門性に及ぼす影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣澤, 愛子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5437

臨床心理学的視点が教師の専門性に及ぼす影響

廣澤　愛子

1．序および目的

近年、学校を教師が専門職として学びあうコミュニティとして位置づけ発展させる「Professional Learning Communities」[1]という考え方が提言されている。こうした教師の学びあうコミュニティをどう支え発展させていくかは今日の教員養成系大学の大きな課題であるが、福井大学教育地域科学部においてはこのような課題に向けて、大学・大学院教育におけるさまざまな教育改革を行ってきた。そして本年度からは、新しい教員養成カリキュラムとして「教育実践研究 A－Ⅰ」という授業をスタートさせ、21 世紀の公教育を担う教職志望の学生に、教師としての生涯に渡る学習（学びあうコミュニティ形成）への導入を行っている。

またこの授業の担当教員らは、教育方法学、障害児教育学、生涯学習研究、臨床心理学など多様な分野の専門性を有している。つまり学生たちはこの授業を通して、さまざまなパースペクティブとアプローチによる研究に触れ、グループディスカッションなどを通して互いに考えを深め合いながら、パブリックな学習コミュニティを形成していくことが可能になる。２１世紀の公教育を担う学生たちには、狭い学問や実践にとらわれることなく、多様な考え方や実践に触れる中で、教師としての専門性を培うことが求められている。したがって教育実践研究 A-Ⅰには、学びあうコミュニティの形成と共に、21 世紀の公教育に適う、多様で深い教師の専門性の獲得をも意図されている。

筆者は臨床心理学を専門とする立場でこの授業を担当し、21 世紀の公教育を考えるのに必要不可欠であると思われる「一人ひとりの固有のニーズにどう応えるか」という視点から問題提起を行った。具体的には、筆者が提示したいくつかの文献の中から、学生たちが任意に文献を選んで読み、グループディスカッションをし、そのディスカッションに触発さ

れて学生自らが意見をつむぎだしていった。筆者以外の担当教員もそれぞれの立場から文献を提示し、計6つの視点から文献が学生に提示され、学生たちは様々な視点からの文献を読むに至っている。

本論では、6つの視点のうちの1つである「公教育の現場において、一人ひとりの固有のニーズにどう応えるか」という視点から筆者が提供した文献を、学生たちがどのように読み取り、また自らの意見を紡ぎ出していったかを明らかにしたい。つまり、臨床心理学的な視点を学ぶことが、教師の専門性の育成にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしたいと考えている。

21世紀の公教育を考える際、「個々の子どものニーズにどう応じるか」、もう少し広く言えば「子どもの個性をどう育むか」という視点は必要不可欠である。筆者は臨床心理学を専門とする立場から、心理的問題を抱えた子どもの心理療法を行ってきたが、学校という場が持つ「みんなで一緒に一つのことを」という圧力に押し潰されて苦しむ子どもにしばしば出会った。彼らの苦悩は深く、公教育（つまり、学校）から離れて自分を生かす場を見つけようと努力する子どもも少なからず居た。しかし一方、近年、公教育において、不登校や発達障害に関する理解が進み、個々の子どもをどう育むかという視点が少しずつ定着しているようにも思われ、特に若い世代の教師や教職を志す大学生は、「子どもの個性をどう育むか」について関心を持つ人が増えている印象がある。

本授業で筆者は、「子どもの個別のニーズにどう応じるのか」という視点から4つの文献を提供したが、その中でも特に大学生が関心を持ったのが、河合隼雄著『子どもと悪』（岩波文庫、1997）である。本書は、「子どもの個性を育むために、大人（教師）はどうあるべきか、何を覚悟するべきか」について、主として臨床心理学的な視点から書かれている。この授業に出席している大学生の多くが将来教職を志望していることを考えると、「子どもの個性を育む」とはどういうことかについて理解することは、大変意義深いと思われる。

そこで本論では、この文献を選んだ学生がどのようにこの文献を読みとり、さらに、本書に触発されて自身の意見を展開させるに至ったかを明らかにすべく、彼らが提出した前期最終レポートを、①文献をどのように読み取っているか、②文献を読み取った後、自らの意見をどのように展開させるに至っているか、③臨床心理学的視点から書かれている本書が教職志望の学生にどのような影響を及ぼしているか、という3つの観点から質的に分析することを目的とする。また、これらの結果に基づき、我々教員の本授業の在り方を振り返る機会としたい。

2．方法

（1）分析対象

河合隼雄著『子どもと悪』（岩波新書、1997）を読んだ大学生11名分のレポート。

（2） 分析者および、分析手順

分析者は、筆者を含む臨床心理学を専門とする者3名。

分析手順は、11名のレポートについて、a. 文献の読み取りに関する記述、b. 読み手自身の意見に関する記述、c. 臨床心理学的な視点からの発想が読み手に及ぼした影響に関する記述、の3つの観点から分析する。

次に、分析者3名の分析結果を検討し、3名の意見が合致した箇所はそのまま採択し、2名の分析者の意見が合致した箇所は合議によって採択・不採択を決定する。

最後に、a、b、cそれぞれに当てはまる記述内容を、より上位の概念によってカテゴリー化できるのであれば行い、内容分析する。なお、これらの分析は「事例のメタ分析」(2)及びKJ法を参考にして行う。

3．結果

（1）　記述内容の分類

記述内容を分類すると以下のようになった。但し、同一内容の記述については統一した。

a. 文献の読み取りに関する記述

■人の心には、弁解しようのない「悪（＝根源悪)」があることを知ることが重要。

■子どもが「根源悪」に触れて悪の怖さを知り、大きな悪を犯さないで済むよう大人が見守る。

■親が子どもをよい子にしようとする「善意」が強すぎることが、結果的に子どもの可能性やさまざまな体験の機会、豊かな感情などを奪い、子どもの個性の喪失を招く。

■親が理想の子ども像を押し付け、「悪」を排除するがあまり、返って子どもは不満がたまり、より大きな「悪」を引き寄せる結果となる。

■教師や大人は、子どもを「指導」しすぎて、子どもの自発的な成長を阻害している。

■子どもが「悪」を犯したときこそ、大人（教師）は子どもと心の交流をするチャンス。

b. 読み手自身の意見に関する記述

■子どもが「根源悪」を体験した後、大人（教師）はある程度の強さで叱り、子どもに十分反省させた上で子どもと関係を回復し「愛」でもって応じるべき。

■子どもにとって本当に悪いこと＝マイナス、と考えるなら、「悪」＝マイナスでは決してないと、大人（教師）が理解して子どもと関係を築くことが重要。

■「悪」に対する自分自身の定義が変わった。この変化が、大人（教師）側に必要なのではないか。

■子ども同士のちょっとしたいたずらには、「その子の個性の萌芽」という可能性もあるのではないか。

■子どもが犯した「悪」が最後には「善」になるよう、大人が見守ることが大事。そのためには子どもを信頼し、大人自身が不安にならないことが大切。

■子どもの「悪」に根気良く付き合ってやることが、子どもの可能性の開花に繋がるのではないか。

■子どもは親や教師に反抗するが、そうやってぶつかり、そして受け止めてもらうことで、自分の感情が徐々に自覚できるようになっていくのではないか。

■「個性」で終わらせず、その中身を読み取り、受け止めてやるのが教師の役割。

c. 臨床心理学的な視点からの発想が読み手に及ぼした影響に関する記述

■子どもの表面的な行動—それが「悪」に見えたとしても—を捉えるのではなく、その行動の裏にある、子どもの真意を読み取り応じることが重要。

■教師は、子ども一人一人の相異（個性）を意識しながらクラス全体をまとめる、というバランスが必要。

（2） カテゴリー化および、内容分析

（1）の記述を上位概念によってカテゴリー化し、内容分析すると以下のようになった。

a. 文献の読み取りに関する記述

i）人間の心に「根源悪」を認めることの重要性

大人と子どもの双方が「根源悪」の存在を認めることが、「大きな悪」の抑止力に繋がる。

ii）大人の善意が子どもの「個性」を潰す

大人の善意（指導、よい子像の押し付け、悪の過剰な排除）が、子どもの可能性や豊かな体験、個性を潰す。

iii）「悪」を大人（教師）と子どもの対話の契機にする

子どもの「悪」は、より深く大人と子どもが心の交流をするチャンスである。

b. 読み手自身の意見に関する記述

i）「悪」に対する大人の認識の在り方

・「悪」＝マイナスではなく、ちょっとした「悪」は子どもの個性の萌芽の可能性もある。

・大人（教師）が「悪」に不安になって、子どもの「悪」を抑え込もうとしない。⇒個性の喪失

ii）「悪」を犯した子どもに大人がどう対応するか

・悪いことは悪いと叱る。

・子どもを信頼し、子どもの「悪」に根気よく向き合う。

・悪を抑え込むのではなく、そこから子どものメッセージを読み取る。⇒子どもの個を理解する

iii）「個性」と「悪」の関係

・大人に「悪」をぶつけることで子どもは自己形成する。

・単に「個性」、単に「悪」と捉えずに、大人（教師）は、その中身を読み取って応じる。

c. 臨床心理学的な視点からの発想が読み手に及ぼした影響に関する記述

i）カウンセリングマインドの重要性

子どもの表面的な行動の裏にある、真意を読み取る「カウンセリングマインド」が大事。

ⅱ）子どもの「個」を見つつクラス「全体」を見る

子どもの「個」を育むことと、クラス全体という「場」をまとめることとの両立が肝要。

4．考察

上記の結果からは、この文献を大学生がしっかりと読み取り、それを基礎に自らの考えを展開していることが感じられる。つまり、大人の善意が子どもの個性を潰しかねないこと、本当に大きな悪（根源悪）を認めることが度の過ぎた「悪」の抑止に繋がることを読み取った上で、大人（教師）が子どもの「悪」に不安にならずに根気よく付き合い、その「悪」に含まれているかもしれない子どもの「個性の萌芽」に気付くことの重要性を指摘している。つまり、本書の内容を読み取った上で、「子どもの個性を育む」ために必要な、大人（教師）の子どもに対する接し方について、自らの考えを提言するに至っていると言える。また、「大人の子どもに対する接し方」について彼らの考えを引き出したきっかけとして、本書の「臨床心理学的視点—表面的には悪にしか見えない子どもの行動の裏にある、真意を読み取る—」が、及ぼした影響も大きいと思われる。ある大学生は、臨床心理学的視点から子どもの行動を理解して気持ちを汲み取るという、子どもの「個」を育む視点を、教師の専門性にどう生かしていくかについて、子どもの「個」を育む視点とクラス全体と言う「場」を見守る視点とのバランスが大切である、と述べている。これは、教師の専門性を踏まえた上で臨床心理学的な視点をどう取り入れるかに言及していると言え、本書を読み取り自らの意見を展開させた上で、これからの公教育が抱える課題を提言しているとさえ言えるだろう。

このように、本授業を通じて、大学生は本書の内容を読み取り、自らの考えを展開させるに至っていることが明らかになった。また、臨床心理学的視点からの発想が、教師の専門性の幅を広げるのに寄与する可能性があることが示唆されたと言えるだろう。

5．今後の課題ーおわりによせて—

本論を通して、大学生が臨床心理学的視点から書かれた文献を読み取り、自らの意見を展開させるに至っていることが明らかになったが、他の視点（教育方法学、障害児教育学、生涯学習研究、臨床心理学など多様な分野）からの文献を通して得た理解と繋げて、総合的に自らの考えを表出するには全く至っていないことが窺われる。教師の専門性を培うとは、さまざまな研究や実践に触れ、それらを別個に捉えて深めるのではなく、それらをつなぎ合わせて保持しながら教師の専門性という一本の糸でつなぐことだと思われる。そこで今後の課題としては、学生が多様な視点のアプローチに触れることを通して得た理解や知識を個別に深めるのではなく、それらをつないでゆき、さらにつなげながら自らの意見を表出できるよう、我々教員の授業の在り方を工夫していきたいと思う。おそらく、我々教員自身が自らの専門性を深めることに終始せず、他の領域の専門性に触れること－多様

な専門性を持った学習コミュニティを形成し、そこに身を置くことーを実現することができたとき、学生たち自身にもそのような学習コミュニティを提供できるようになるのではないか、と思われる。

6．文献

1)M. W. McLaughlin & J. E. Talbert ed., *Building School-Based Teacher Learning Communities*, Teachers College Press, 2006; L. Stoll & K. S. Louis ed., *Professional Learning Communities*, Open University Press, 2007; A. Lieberman & L. Miller ed., *Teachers in Professional Communities*, Teachers College Press, 2008; A. Lieberman & D. H. P. Mace, "Teacher Learning: The Key to Educational Reform", *Journal of Teacher Education,* Vol. 59, No. 3, 2008; S. P. Gordon ed., *Collaborative Action Research: Development Professional Learning Communities*, Teachers College Press, 2008.

2)岩壁茂「事例のメタ分析」日本家族心理学会編『家族間暴力のカウンセリング』金子書房、2005 年、154-169 頁